

## 『イエスを仰ぎ見る』 ヨハネの福音書 3 章 11～16 節

## 1. 単数形から複数形へ

3 章の前半部は、ニコデモの記事となっています。ニコデモは、ユダヤ人の指導者で律法をよく知っているはずでしたし、イエス様の行うしるしを見て、イエス様が神のもとから来られた教師だと認めていました。でもイエス様が言われた「新しく生まれる」ことについては、全く知りませんでした。「水と御霊によって生まれる」とは、水のバプテスマだけでなく、聖霊の中に浸されるという経験の必要性を教えました。これを信じることによって「新しく生まれる」ことが実現します。

本日の 11 節からも、10 節までのイエス様とニコデモの対話の続きとして語られています。しかし、10 節までとは語り方が違ってきます。10 節までのところでイエス様は「わたし」と言って、ニコデモに対して「あなた」と言っていました。ところが 11 節からは「わたしたち」、「あなたがた」といつのまにか複数の者たちの間での対話になっているのです。それは何のためかという、イエス様の言葉に、ヨハネが連なっている教会の言葉を載せて語るためです。

ヨハネの福音書が書かれたのは、紀元 1 世紀の終わり頃であると考えられます。ということは、イエス様の十字架と復活と昇天、そして聖霊の降臨によって教会が誕生してから 50 年以上の時間が経っているということです。エルサレムにおいて、少人数から始まった教会は、この間に驚くべき早さで成長してきました。それに伴って教会を取り巻く状況もかなり変わってきています。紀元 60 年過ぎ頃には、ローマで、皇帝ネロによる最初の迫害が起りました。教会は、成立から約 30 年で、エルサレムから遠く離れたローマで迫害を受けるほどの群れに成長したのです。

ユダヤにおいても状況は大きく変化しました。エルサレムの神殿も破壊されてしまいました。ユダヤ人たちは、国を失うと共に、信仰的な拠り所を失ったのです。その破局の中で、ユダヤ教の指導者たちは、残されたもう一つの拠り所によってユダヤ教を再建し、神の民としてのユダヤ人の歴史を守ろうとしました。その拠り所とは「律法」です。「律法」を守り、「律法」に生きる民となることで、神の民であり続けることができる、そう主張してユダヤ人たちをリードしていったのが「パリサイ人」でした。

ヨハネの福音書が書かれたのは、その頃、つまり「パリサイ人」によって、「律法」を中心としてユダヤ教が再建されつつあった時代だったのです。その動きの中で「パリサイ人」は、イエスを救い主とする教えは「律法」に従って生きる正しいユダヤ教の教えではないとして、イエスを信じる者たちをユダヤ人の共同体から追い出そうとしていました。それがはっきりと現れているのが、9 章 22 節で「彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちの恐れからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者がいれば、会堂から追放すると決めていた。」とあります。つまりキリスト教徒はユダヤ人の会堂から追放する、そういう迫害は、イエス様が地上を生きておられた時代にあったことではありません。これはヨハネの福音書が書かれた頃のユダヤにおける状況なのです。

ニコデモが夜にイエス様のもとを訪ねて来たことにも、この状況が反映しています。それは、この時代には、イエスを神からの救い主と信じる者は会堂から追放する、という取り決めがなされていたからです。イエス様が地上にいた時代にはそのようなことはありません。他の福音書では、「パリサイ人」の人でも、昼間にイエス様のところに来て質問したり、論争をしかけたりしています。人目を忍んで来るのは、ヨハネの福音書が書かれた時代のことなのです。

そしてもう一つ、その頃起っていたことが描かれています。それは、「パリサイ人」による迫害が始まっていた中でも、ひそかにイエス様を信じ、教会の教えを聞きたいと思っていた人々がいた、ということです。心の中ではイエスを救い主と信じているが、会堂から追放され、ユダヤ人の共同体から村八分にされてしまうのは嫌だから、おおっぴらにその信仰を告白することができない、そういうどっちつかずの状態にいた人が、当時いたようです。そのことが 12 章 42 節にも「しかし、それにもかかわらず、議員たちの中にもイエスを信じた者が多くいた。ただ、会堂から追放されないように、パリサイ人たちを気にして、告白しなかった。」と語られ、ニコデモはこの人たちの代表なのです。

このようにヨハネは、イエス様の生涯を描く中に、自分たちの教会の現在の状況を書き込んでいます。ヨハネの福音書のこのような特徴をとらえておくことが、この福音書を理解するためには必要なのです。

そして、このようなヨハネの福音書の姿勢は、私たちがイエス様を信じる信仰者として生きようとするにおいて大切にすべきことです。なぜなら、イエス様を信じて生きるとは、イエス様の教えや御業を、過去の歴史上の出来事として受け止めるだけでなく、今この時代を生きている自分たちの問題として、自分たちに対する語り掛けとして受け止めることだからです。ヨハネの福音書はまさにそういう姿勢でイエス様の生涯を振り返り、語り直しているのです。

## 2. 知っていること見たことの証し

これらのことをふまえて、改めて 11 節で、イエス様はニコデモに、「**まことに、まことに、あなたに言います。わたしたちは知っていることを話し、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れません。**」と言いました。イエス様を救い主と信じ、従って歩んでいる教会は、「**知っていることを話し、見たことを証している**」、つまり教会は、神のひとり子主イエス・キリストの生涯と十字架の死、そして復活を通して実現された神による救いの恵みを知っており、それを自分たちのための出来事として体験しており、その救いの恵みを「**証し**」しているのです。しかし、「**あなたがたはわたしたちの証しを受け入れません**」、その「**あなたがた**」とは、イエスを救い主と信じる者たちを会堂から追放しようとしているユダヤ教徒たちです。ニコデモはその中心である「パリサイ人」の一員でありつつ、しかしイエス様を神ものとして来たる教師であると思っています。でも会堂から追放されることを恐れて、人目を忍んでこっそりとイエス様の教えを聞きに来ています。迫害の中でどっちつかずの態度をとっている人です。そういう人たちに対してヨハネの教会が語りかけている言葉が 11～15 節に記されているのです。

## 3. 天から下って来た者、天に上った者

12 節には、「**わたしはあなたがたに地上のことを話しましたが、あなたがたは信じません。それなら、天上のことを話して、どうして信じるでしょうか。**」とあります。「**地上のこと**」であれ、「**天上のこと**」であれ、つまり信仰において知り、受け止めるべき真理の全ては、イエス様によってこそ示されている、ということです。なぜイエス様によってでなければ信仰の真理を知ることができないのか、その理由を語っているのが 13 節の「**だれも天に上った者はいません。しかし、天から下って来た者、人の子は別です。**」です。「**地上のこと**」であれ「**天上のこと**」であれ、信仰において知っておくべき全てのことがイエス様によってこそ示されるのは、「**人の子**」つまりイエス様のみが、「**天から下って来た者**」であり、また「**天に上った者**」でもあるからです。イエス様は、ご自身がまことの神である「**ことば**」として、父なる神と共に初めから天におられ、天地創造に関わっていました。そのことが、1 章 1～5 節に「**初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。**」と語られていました。そしてこの命でもあり光でもある**ことば**が、肉となってこの世に来て下さり、地上を歩んで下さったのです。それがイエス様の地上の生涯です。つまりイエス様こそ、「**天から下って来た者**」なのです。そしてイエス様はこの地上において、私たちの罪を全て背負って十字架にかかって死んで下さいました。私たちのための救いの御業を、ご自身の命をささげて実現して下さいました。そのイエス様を父なる神は復活させ、永遠の命を生きる者とし、天に上らせて下さいました。今イエス様は天において、再び父なる神と共におられます。このイエス様こそ「**天に上った者**」でもあるのです。

## 4. 水と御霊によって

神のひとり子主イエスによって、私たちの救いのために必要な全てのことが成し遂げられました。この世界は、そして私たちは、今やイエス様によるこの救いの恵みの下にあるのです。その救いは、地上において今は隠されていて、誰の目にもはっきりと分かるものにはなっていません。しかし教会はその地上において、イエス様による救いをはっきりと知っており、それを見て、そのことを「**証し**」しています。ヨハネの教会も私たちの教会も同じです。

なぜ教会はこの救いをはっきりと知り、それを見ることができのでしょうか。イエス様は 3 節で、「**人は、新しく生**

まねなければ、神の国を見ることはできません。」と言いました。「神の国を見る」それがイエス様による救いをはっきりと知り、それにあずかることです。その救いを見るためには、新たに生まれなければならないと言っています。

しかし私たちは、自分の力で新たに生まれることはできません。ニコデモが言ったように、もう一度母親の胎内に入って生まれることなどできないのです。だから私たちは、自分の力や努力によって、イエス様による救いを見ることも信じることもできないのです。しかしイエス様は5節で「人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。」と言いました。自分の力で新たに生まれることのできない私たちを、神が、「水と御霊」によって新たに生まれさせて下さるのです。そして私たちを「神の国」に、イエス様による救いに入れて下さるのです。それは教会で洗礼を受けることを意味しています。洗礼を受けることによって、私たちは救い主イエスと結び合わされ、新しく生まれ変わってキリストの体である教会の一員とされます。それゆえに教会は、イエス様による救いをはっきりと知り、それを見つめ、「証し」をしつつ歩むことができるのです。

洗礼において私たちを新しく生れさせ、キリストの体である教会に連なる者として下さるのは聖霊なる神です。聖霊によって新たに生まれることによって私たちは、イエス様による救いをはっきりと知り、それを見つめて「証し」する者となるのです。教会は、聖霊によって新しく生まれ変わり、イエス様による救いをはっきりと知らされたので、それを「証し」することができるのです。

しかし、そのように教会が、私たちが、イエス様による救いを「証し」しても、「あなたがたはわたしたちの証しを受け入れません。」という現実があります。そもそもこの救いの事実は、「水と御霊」とによって新たに生まれなければ知ることのできないものなので、私たちの「証し」がなかなか受け入れられないのは当然のことです。しかし大事なことは、なかなか受け入れてもらえないという現実の中で、聖霊が働いて下さることを信じて、「証し」を続けることです。ヨハネの教会も、迫害の中で「証し」をし続けました。「わたしたちは知っていることを話し、見たことを証している」という言葉がそのことを示しています。そのように教会が「証し」、伝道をし続けているからこそ、ニコデモのように、迫害を恐れつつも、人目を忍んでこっそりと教えを聞きに来るような人たちが現れるのです。

ニコデモは、この後も何度か登場します。「パリサイ人」の一員であり、地位の高い議員でもあるという立場の中で彼は、イエス様と弟子たちにある共感をもって発言していくのです。そして最後には、十字架につけられたイエス様の遺体を丁寧に埋葬するために、香料を持って登場します。19章39～42節に「以前、夜イエスのところに来たニコデモも、没薬と沈香を混ぜ合わせたものを、百リトラほど持ってやって来た。彼らはイエスのからだを取り、ユダヤ人の埋葬の習慣にしたがって、香料と一緒に垂麻布で巻いた。イエスが十字架につけられた場所には園があり、そこに、まだだれも葬られたことのない新しい墓があった。その日はユダヤ人の備え日であり、その墓が近かったので、彼らはそこにイエスを納めた。」とあります。このニコデモが最終的にイエス様を信じる信仰者となったのかどうか、そこははっきりしません。しかしこの福音書から分かることは、ヨハネの教会が、ニコデモのような半信半疑の状態にいる人が、イエス様を本当に信じる者となるために、聖霊の働きを信じて「証し」をし続けたということです。

## 5. 仰ぎ見る

そのことを示しているのが14節の「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。」という言葉です。イエス様による救いを告げる教会の「証し」を受け入れようとしない人たちにとって、最もネックとなっているのはイエス様の十字架の死です。十字架にかけられて死刑に処されたイエス様が、「神のひとり子だとか救い主だなどということはどうい信じられない」と彼らは思っているのです。つまり十字架の死が、イエス様を信じる上での大きな障害となっているのです。14節は、そのイエス様の十字架の死が、私たちの救いのために必要不可欠なことであり、またそれは神の御心によることだったのだ、ということを示そうとしているのです。

「モーセが荒野で蛇を上げたように」というのは、民数記21章4～9節に「彼らはホル山から、エドムの地を迂回しようとして、葦の海の道に旅立った。しかし民は、途中で我慢ができなくなり、神とモーセに逆らって言った。「なぜ、あなたがたはわれわれをエジプトから連れ上って、この荒野で死なせようとするのか。パンもなく、水もない。われわれ



はこのみじめな食べ物に飽き飽きしている。」そこで【主】は民の中に燃える蛇を送られた。蛇は民にかみついたので、イスラエルのうちの多くの者が死んだ。民はモーセのところに来て言った。「私たちは【主】とあなたを非難したりして、罪を犯しました。どうか、蛇を私たちから取り去ってくださるよう【主】に祈ってください。」モーセは民のために祈った。すると【主】はモーセに言われた。「あなたは燃える蛇を作り、それを旗ざおの上に付けよ。かまれた者はみな、それを仰ぎ見れば生きる。」モーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上に付けた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぎ見ると生きた。」と語られていることです。イスラエルの民が昔、経験したことです。イスラエルの民が、神の力強い御手によってエジプトから救い出され、約束の地カナンに向かって荒野を旅していた時、主は彼らが生きていくために必要なパンや水を何回も与えました。それなのに彼らは神とモーセに対してつぶやきました。すると神は怒られて彼らに毒蛇を送り、それにかませたので、つぶやいた者たちはその毒蛇にかまれ、イスラエルのうちの多くの者が死んだのです。これは、神に反逆する者たちへの神の裁きでした。この苦しみの中からイスラエルの民は自分たちの罪を悔い改め、モーセにとりなしの祈りをするように願いました。それでモーセが祈ると、神は「燃える蛇」を作り、それを旗ざおの上に付けよ、と言うのです。かまれた者はみな、それを仰ぎ見れば生きます。そして、蛇にかまれた者が「青銅の蛇」を仰ぎ見ると生きたのです。これは、どう考えても理屈に合わない出来事です。「青銅の蛇」を仰ぎ見ただけで、いのちが助かるというのは、普通だったら考えられません。しかし、理解できなくても、神の言葉を信じてその通りにした人たちは救われました。

いったいこれはどういうことを意味していたのでしょうか。この「青銅の蛇」が竿の先に上げられたことが、イエス様が十字架にかけられたことと重ね合わされています。イエス様の十字架の死は、神に対する罪によってもたらされる滅びからの救いのためにあの「青銅の蛇」が上げられることが必要だったように、私たちが罪を赦され救われるためにどうしても必要なことだったのです。私たちは、最初の人アダムが罪に陥って以来、何千年という間、その罪のために死ななければならない運命にありました。それは、ちょうどイスラエルの民が荒野で神につぶやいて、毒蛇にかまれた時のようです。しかし、神はあの時モーセに命じて「青銅の蛇」を旗ざおに上げたように、天から下りて来られた神の御子イエスを十字架につけてくださったので、このイエスを仰ぎ見る者は救われるようにしてくださったのです。あの「青銅の蛇」は、十字架につけられたイエス・キリストの姿であったのです。それは、人の子を信じる者がみな、永遠のいのちを持つためです。

このようなことを聞くと、そんな非科学的で迷信じみたことに惑わされるものかと言う人もいるでしょう。そんなことは、自分の理性が許さない、という人もおられるでしょう。事実、旗ざおの上につけられた「青銅の蛇」を仰ぎ見る者は死ななくても済むのだと聞いた人々の中にも、その反応は必ずしも同じではなかったでしょう。あるいは、そんな迷信じみたことをだれが信じるものかと拒絶した人もいたでしょう。そういう人はみな死んで行きました。しかし、苦しみのあまり、わらをもすがるような思いで、天幕からはい出し、旗ざおの見えるところまで来て、その上に付けられていた「青銅の蛇」を仰ぎ見た人は救われました。

15 節に「それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」と語られているように、父なる神はこのことによって、イエス様を信じる者が永遠の命を得るための道を開いて下さったのです。ヨハネの教会の人々はこのようにして、イエスを救い主と信じようとしないう人々に「イエス様の十字架の死によってこそ私たちの罪の赦しを実現したのだ」と「証し」していったのでしょうか。

その教会の伝道の中から生まれたのが、16 節の「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」という有名な言葉です。私たちの信仰を一言で言い表しているこの言葉は、教会が聖霊の御業を信じて伝道していったことの中で与えられたもののなのです。どうでしょうか。あなたも心からイエス様をあなたの人生の主として受け入れることができたでしょうか。

イザヤ書 45 章 22 節には「地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神だ。ほかにはいない。」とあります。私たちが救われる道はただ一つ、キリストを仰ぎ見ることです。キリストを仰ぎ見る者は、みな救われ、「神の国」に入れていただくことができます。あなたもキリストを信じ、その生涯、キリストを仰ぎ見続けてください。